



東京毎日新聞「演藝界」記事
(大正6年1月21日付)



日比谷公園野外音楽堂 (写真ハガキ、個人蔵)

松竹映画とその時代の音楽事情

久保田 雅人

このレポートは、松竹蒲田撮影所があった、大正九年から昭和十一年まで、日本人の西洋音楽受容という観点から、どのような西洋音楽が日本に流れていたかをまとめたものです。ですが、日本人の西洋音楽受容史という意味では、江戸末期まで遡らなければなりません。

一 軍楽隊による西洋音楽の紹介

日本の大衆が西洋音楽と接したのは、江戸末期の薩英戦争が契機になっていると言われています。

薩英戦争によって、日本と欧米の軍事力の差に驚いた薩摩藩が、英国に軍事を学び西洋風軍隊を導入します。この時、同時に軍楽隊を導入します。サツマ・バンドと呼ばれるそうです。そして薩摩―長州軍が東海道をとり江戸に向かいます。この時に行進曲として「宮さん宮さん」を演奏・歌唱しながら行進し、この曲が各地に伝搬します。この「宮さん宮さん」が日本初の全国的ヒット曲と言われています。明治に入り、陸軍・海軍ができたときに軍楽隊も陸軍・海軍に分かれ、それぞれの軍楽隊の基礎となります。

明治三六年に日比谷公園ができ、その二年後には野外音楽堂（上の写真。現在の小音楽堂にあたります）ができる。陸海軍それぞれの軍楽隊が、日比谷公園の野外音楽堂でコンサートを行い、行進曲やポルカ、邦楽などの吹奏楽編曲ものを演奏するようになります。こうして、大衆は軍楽隊の響きに慣れ親しんでいきます。また、行進曲「軍艦」の作曲者としても知られる、瀬戸口藤吉帝國海軍軍楽隊隊長の進言により弦楽器も導入し、管弦楽にも挑戦する動きを見せます。

二 浅草オペラが全盛期を迎える

上の新聞記事は、大正六年一月二日付けの東京毎日新聞の「演藝界」という記事で、演芸の紹介記事です。ここで重要なのは、始めの方に「オペラコミック」でオッフェンバックのオペレッタ「美しきヘレナ」が上演されること、そして最後の方に浅草常盤座で二二日より高木徳子一座が「女軍出征」という歌舞劇（ミュージカルのようなもの）を行うことが記されています。

前者は、帝國劇場歌劇部が解散した後に、指導していたヴィットリオ・ジヨバンニ・ローシーが私財を投じて赤坂見附にローヤル館を作り、そこで日本人によるオペレッタを興行していました。しかし経営は芳しくなく、ローシーは数年後には私財を使い果たし、失意のうちにアメリカへ渡ります。



佐々紅華作「目無し達磨」レコード
(個人蔵)



浅草六区の賑わい
(写真ハガキ、個人蔵)

一方、後者の高木徳子一座ですが、高木徳子は夫と共に渡米し、現地で映画女優や舞踏家としてアメリカを巡業し、第一次世界大戦の勃発で日本に戻ってきた、新進気鋭の女性でした。彼女が、後に音楽評論家となる伊庭孝と組んで作ったのが「女軍出征」という歌舞劇だったのです。これが大当たりをします。そしてこれが、浅草オペラ第一号の演目となります。

やがて、浅草にローヤル館を失った帝劇組が浅草に合流するようになります。こうして、浅草六区(上の写真)はオペラの聖地になっていきました。浅草オペラは、「金龍館」(現在はユニクロになっています)を根城とし、積極的に活動し、松竹蒲田撮影所ができる大正九年ころに、最盛期を迎えます。「魔笛」、「アイダ」、「カルメン」(特にカルメンは大当たりし、カルメンを上演すると、金龍館の客席はお客が溢れんばかりだったそうです)と言ったグランド・オペラのほか、オッフエンバックの「天国と地獄」や「ブン大将」といったオペレッタも盛んに上演されたり、日本人による和製オペレッタも現れるようになりました。代表作としては、「君恋し」の作曲者としても知られる佐々紅華作の「カフェーの夜」「目無し達磨」「勸進帳」があります。

しかし、大正一二年の関東大震災によって、人的被害こそなかったものの、ほとんどの楽譜や衣装が焼失、人気は急速に下火になり、大正一五年には活動を停止します。

三 童謡運動の発展

それまで、子供への西洋音楽教育は、もっぱら文部省唱歌によるものでした。文部省唱歌は多くが明治時代に作られたこともあり、富国強兵、殖産興業といったテーマが見え隠れするものでした。また、歌詞が文語体のもも多く、子供などにはわかりづらいという批判がありました。そこに登場するのが鈴木三重吉です。彼は雑誌「赤い鳥」を創刊し、雑誌上で多くの文学者、作曲家を巻き込んで、子供のための音楽、即ち童謡を次々と発表していきます。やがて、追従するように、初代編集長を野口雨情とした雑誌「金の船」が創刊されます。こうして、子供たちの間に童謡が浸透すると同時に、やがて童謡に芸術性を模索する動きも現れます。山田耕筰の「赤とんぼ」「からたちの花」はその代表例です。

四 時代は昭和に、それと共に一大文化変革が

時代が昭和に移ると、関東大震災後の帝都復興計画で東京が復興します。そこで銀座に、呉服店から衣替えしたデパートが次々と建てられます。こうして銀座は、新しい文化の発信基地としての役割を、担うこととなります。時を同じくして、アメリカ文化の大波がやってきます。洋装がもてはやされ、洋装で身を固めた時代の最先端を自認する人々がモボ・モガと呼ばれるのもこのころです。

ジャズソング

「あほ空」レコード

(個人蔵)



初期の寶塚少女歌劇団のレコード
(個人蔵)

寶塚少女歌劇団

「モンバ里」のレコード

(個人蔵)



時は少し遡り、大正一四年のことになりますが、東京都港区愛宕山に、日本初のラジオ局、東京放送局(現NHK)が誕生します。その後、大阪、名古屋に放送局ができ、三局体制が定着します。ラジオの普及はすさまじく、当初五千人だった受信者数が、昭和七年には百万人を突破しました。時を同じくして、安価なポータブル蓄音機が登場、家庭にラジオと蓄音機が入ってきます。

このことは、家庭に娯楽が入ってきたことを意味します。それまで娯楽は歓楽街に行つて楽しむものでした。しかし、家にながら娯楽を享受できる環境ができました。レコード会社は、当初、ラジオの普及に、レコードが売れなくなるのではないのかと、危機感を抱いていました。しかしその結果は、大衆はラジオ放送で人気が出た曲のレコードをかうようになります。そうになると、まずはラジオで放送された曲をレコード会社が録音し売ようになりますが、すぐに、作ったレコードをラジオで放送してくれるよう、動くようになります。こうして、ラジオからヒット曲が生まれる時代になります。「あほ空」「アラビアの唄」などのジャズ・ソングがヒットした背景はこのラジオにあります。

一方そのころ、寶塚は大きな問題を抱えていました。大正三年から少女歌劇団の活動を行ってきましたが、歌劇女優は当然成長するわけです。しかし歌劇のレパートリーはといえば、当時は「浦島太郎」「桃太郎」といったおとぎ話や、少女たちの「生活の一コマ」を扱ったものが主で、

これらは「お伽歌劇」と言われていました。これによって、女優がレパートリーに合わないという問題が生まれてきたのです。そこで、帝劇歌劇部において、寶塚で教師をしていた岸田辰彌(「麗子像」で有名な岸田劉生の弟)が一年間洋行し、最先端の文化を吸収します。こうして帰国した彼は、寶塚の大改革に臨みます。

まず、レパートリーを大人向けのものにし、使われる楽曲も西洋音楽中心にします。また演出面では、ライندگانや大階段の設置など、現在のタカラヅカの基礎を作ります。そうして上演されたのが、彼の一年間の洋行をまとめた「モンバ里」というレビューです。これが大当たりし、その後寶塚は、パリやニューヨークをテーマとしたレビューを次々と打ち、それは、寶塚が西洋文化の発信基地になったことも意味していました。

五 本格的管弦楽団の登場

日本で本格的な管弦楽団を創ろうという動きは、大正初期から起りました。大正四年には山田耕筰が、三菱財閥の岩崎小弥太をスポンサーとして「東京フィルハーモニー會」を創り、定期的な公演を帝國劇場で行うようになります。これが日本での本格的管弦楽団の始まりになります。しかし山田耕筰の浮気が発覚し、それに激怒した岩崎小弥太がスポンサーを降りてしまい、「東京フィルハーモニー會」は数年で解散してしまいます。



活動弁士後援会の
唯一のチラシ（個人蔵）



近衛秀麿／新交響樂團のレコード
（個人蔵）



山田耕柝／日本交響樂協會のレコード
（個人蔵）

しかし、山田耕柝の意欲は収まらず、その後も本格的な管弦楽団を創ろうという動きが続きますが、関東大震災によつて一時中断します。

大正一三年、山田耕柝は、ベルリンに留学し指揮や作曲を学んだ近衛秀麿と共に、当時中国のハルピンに亡命してきたロシアの楽員を日本に迎え、日本人演奏家との合同オーケストラによる演奏会を企画します。

そうして大正一四年、東京歌舞伎座で「日露交歓交響管弦樂會」が近衛秀麿の指揮で挙行されます。演奏会は成功裏に終わり、常設のプロ・オーケストラ設立の機運が高まり、山田耕柝と近衛秀麿が中心となり日本交響樂協會を設立します。

しかし、数年後山田耕柝と近衛秀麿が衝突し、オーケストラは分裂します。近衛秀麿は私財を投じ「新交響樂團」を設立します。これが、現在のNHK交響樂團となります。昭和五年には、当時ヨーロッパでも現代音楽であったマーラーの交響曲第四番全曲の世界初録音を行っています。

六 活動寫眞館の風景

最後に簡単に、当時の活動寫眞館の様子に触れておきます。当時はサイレント（無声映画）でしたので、BGMをつける必要がありました。そこで、専属の管弦楽（といっても、どちらかと言うとサロン・オーケストラに近い、十数名の規模ですが）を擁していました。また、専属歌手も

置き、幕間には映画の主題歌を歌ったり、管弦楽によるライト・クラシックが演奏されたりしていたようです。

サイレント時代、映画の主題歌となった曲が、どうやって広がり、ヒットしていったのか。それは、彼らの歌や演奏で一般大衆に浸透していったからです。ヒットした主題歌は、歌手が歌い始めると、観客も一緒に歌い始めたそうです。「蒲田行進曲」も彼らの働きによつて広まった一曲だったのです。

また、映画の上演中、映画の場面を説明する「活動弁士」が活躍しました。この活動弁士の良しあしで映画館の売り上げが変わるほど、活動弁士は重宝がされていました。有名な弁士になると、今でいうファン・クラブができたくらいです。

しかし、トーキー映画が主流になると、管弦楽や歌手、活動弁士と言った人々が映画館にとつて無用な存在となり、山田耕柝らによる抵抗運動も虚しく齧首され、文字通り表舞台から消えていきます。それは、一つの時代の終焉と、新たな時代の到来を告げるものでした。そうした時代の節目で、松竹蒲田撮影所も大船に移転することになっていったのです。